

魅惑的で啓蒙的なサイ

ガーヤトリー グプタさんとの対話

第二部

スワミがチットラーヴァティー川の河原で食物を物質化

GG： チットラーヴァティー川の河原で起きた出来事をお話したいと思います。

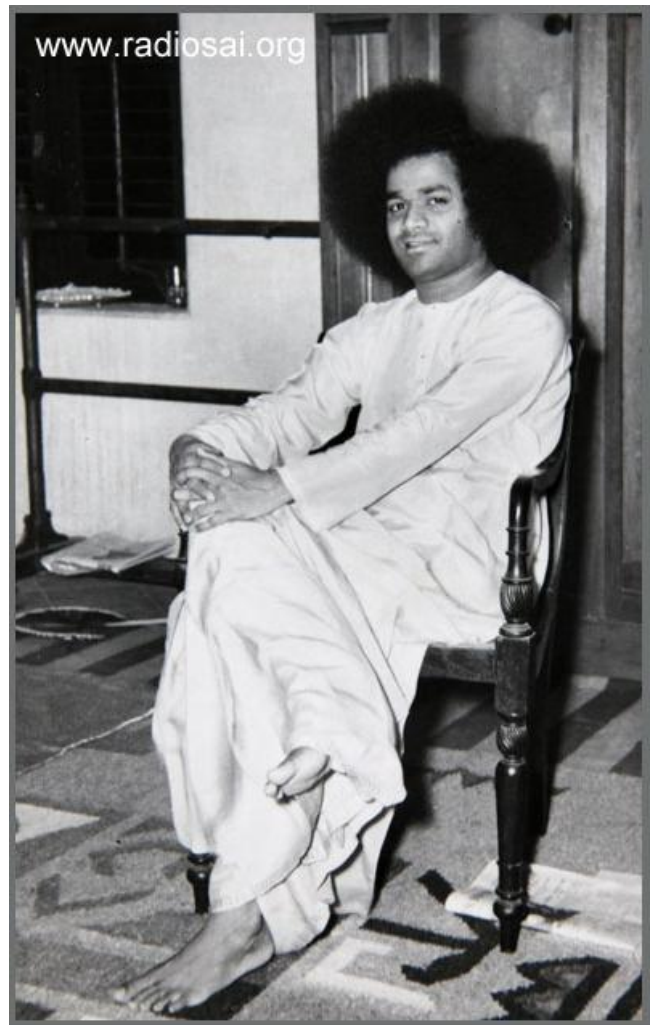
帰依者たちはとても疲れてお腹がすくと、言ったものでした。「スワミ、お腹がすきました。何か食べさせてください」そして、スワミは、

「オッケー、オッケー、みんなすぐに疲れるのですね。さあ、私についてきなさい」と言われたものでした。スワミの周りには、常にスワミの後からついて来て、スワミの言われることなら何でも従う人々がいました。スワミは帰依者たちを座らせ、一人ずつ指差して、

「何が食べたい？」、「何が食べたい？」、「何が食べたい？」と聞かれました。そして帰依者たちは自分の要求を述べるのでした。

「スワミ、ラッドゥーをください」、「スワミ、私はマイソールパック」、「スワミ、私にはジェレビーを」。(ラッドゥー、マイソールパック、ジェレビーはすべてお菓子の名前)

「オッケー、みんな、目を閉じなさい」と言って、スワミは美しい御手を河原の砂の中に入れ、一秒も経たない内にそれらのお菓子を取り出されました。一つずつ、出来たての熱々で。そして、頼んだ人にそれぞれのお菓子を手渡されたのです。それらは本当に美味しいお菓子でした。



サイのリーラー（遊戯）が歌の作曲を誘う

GG: クップム家の者は皆、歌が上手でした。彼らはスワミの数々の奇跡を歌にしました。そして、スワミはご自分でシンバル（ターラム）を叩かれました。スワミはシンバルをすごい速さで、頭を左右に振りながら叩いておられました。そのご様子は本当に生き生きとして楽しいものでした。その歌を歌ってみましょう。

RS: この歌はどこで作られたものですか？ 何かが起こって、それを記録したものから歌詞と曲をつけたのですか？

GG: そうです。この歌は特別にスワミのために作曲されたものです。私が二行ずつ説明しましょう。

ナーマスマラナーナンドム サティヤ サイ ババ
ナーマスマラナーナンドム サティヤ サイ ババ
コーマラーンガ カーミタールター ラマナ シャラヌ
マンヌローナ ヴェンナ ヴァンティ タニヴィ ラッドゥ …

最後の行の意味は、「こうしてスワミはラッドゥーを砂から取り出されました」

そして…

ピナヌ バクトゥラ マナス ランジラ ガーナム チェースイ…

あなたは食べた後、歌わなくてはなりません；「ガーナム チェースイ」というのはそういう意味です。

そして…

モートルロナ ペトルル レーケ ニール ポーシ
ダーリ ナディピナ ショウリ ニーヴェ ガウリ ラマナ…

私の叔母、ヴィジャヤンマーの結婚式を執り行うため、スワミは遠路プッタパルティからクップムまで来られる途中でした。急に車が止まり、みんなが言いました。

「スワミ、ガソリンがありません（スワミ、ペトルル レドゥ）」

「ドゥンナポータ、その水のボトルを取って、ガソリタンクに水を入れなさい」

モートルロナ ペトルル レーケ ニール ポーシ
パーム パーマニ パーマルランダル ソマーナーター...



私たちのスワミはとても悪戯好きで、帰依者たちは何度もハラハラさせられました。帰依者たちが並んで座っていると、スワミは突然、

「あそこを見てごらん、大きなコブラがこちらに向かって来ます」と言われたりします。

「スワミ、どこですか、スワミ？」皆は震えながら尋ねました。急に巨大なコブラがどこからともなく現れて、鎌首をもたげ、ゆらゆらと揺れながらスワミのダルシャン（神を見ること）を受けたのです。スワミは「ラー、ラー」（おいで、おいで）とペットを呼ぶようにそのコブラをお呼びになりました。その後、スワミは「行きなさい、行きなさい。（エッリ ポ、エッリ

ポ）」と言われ、コブラはすぐに姿を消しました。

パーム パーマニ パーマルランダル ソマーナーター
パーム リーヴァイ チットラヴァティロー スワミ ヴァッチュ

RS： つまり、バガヴァンはあなたのおばあさんの住むクッパムへ行かれる途中だったのですね？ あなたの叔父さんたちは車に十分なガソリンを入れていなかった。そしてスワミは実際に、ガソリン代わりに使うよう水の入ったボトルをお渡しになったのですね？

GG： そうです。

RS： 同じような出来事は他にも聞いたことがありますが、この話は知りませんでした。その、結婚式をした叔母さんが『アンニャター シャラナム ナースティ』（邦題「あなただけが私の救い主です」）を書かれた叔母さんですね？

あなたの家族は音楽に秀でた家族だったのですか？ リーラー（神の遊戯）が行われると、あなたの家族はそれらを題材にしてミュージカルに仕上げた。スワミはそれらを聞かれましたか？ そして楽しまれたのですか？

GG： スワミに関する出来事の歌は、全部で500曲以上にのぼります。そして私の家族はスワミの御前でそれらを演奏し、スワミは楽しまれました。中にはスワミが教えてくださった曲もありました。

RS： 比較的最近、スワミはあなたのご家族に、プッタパーティに戻って来て演奏するように言われましたね。数年前、スワミはクップム家の人々をお呼びになり、あなたのご家族はバガヴァンの御前で演奏をされました。そのことについて話してください。



GG： わかりました。チットウール サミティ（チットウールのサイ センター）を通じて二年前の2008年に知らせがありました。私たちは2月4日にスワミの御前で演奏する機会を与えられました。クップム一族の全員がプッタパーティに来たのです。私の母と叔母を見るなり、スワミはたいそう喜ばれました。スワミは私たちに歌うようにおっしゃいました。叔父のムラリーが、これらの思い出深い物語とスワミの栄光を全て読み上げました。でもスワミはあまりにも感傷的になり、私たちが一曲を歌っただけで演奏は終わりになりました。私たちは10曲も用意して来ていたのですが。

クップム家の子供たちの名前を付ける

RS： あなたのご家族のほとんどはスワミが名付け親だと聞いています。そしてすべての結婚式もスワミの恩寵を受けて行われたそうですね。その子どもたちもスワミが名付けられました。あなたの幸運なご家族のお名前が、どのようにしてバガヴァンから授けられた

かを話して頂けますか？



GG： 孫たちが名前を付けて頂いただけでなく、ひ孫たちまで付けて頂きました。名前を挙げてみます。ラーディカに始まって、ニーラジャ、シリーラータ、ラヴァンニヤ、マノーハル、キラン、スマナ、サンデーシュ、スプリヤ、アパルナ、プラナヴ、プラシャーンティ、そして一番最近では五世代目がすでに始まっています。彼は「アーディッティヤ」と名付けられ、それから最新の名前では「パヴァナシリー」です。スワミはこの子の名前を付けられた時、車に乗っておられました。そして、
「ハヌマーンのように、彼女も山から山へと高く飛ぶだろう」とおっしゃいました。

RS： クップムのラーダークリシュナンとラーダー夫妻の子孫に生まれるのは何という恩寵でしょう。子どもたちは皆、深く祝福されていますね。

スワミの恩寵が私をクップム家に生まれることを可能にした

GG： 私は生まれる前から祝福されていたと思います。どうしてだかわかりますか？
息子が生まれることに執着していた私の父は、母が息子を生むことを望んでいました。私は、ラーディカ、ニーラジャ、ガーヤトリー、シリーラータという四人姉妹の三番目の娘です。ですから、母の妊娠が九ヶ月目に入った時、父は母をスワミのところに連れて行きました。クップムの家族が来るや否や、スワミは急いで外に出て来られました。スワミは

小さな子どものように走って来られ、ベランダから外を覗いておられました。

「おお、いつ来たのですか？ 旅は快適でしたか？ さあ、休息を取って、ダルシヤンの時に戻って来なさい」とおっしゃいました。

そして、九ヶ月の身重でセーラムから長旅をして来た私の母を見て、スワミは、「エンドウコッチャーヴ？」とおっしゃいました。最初にスワミは「なぜ来たのですか？」と聞かれたのです。



れたのです。

「スワミ、私は息子が欲しいのです」

RS： ちょっと遅過ぎませんか？ 出産の一週間前ですよ。

GG： スワミは、「マン・オブ・ミラクル（奇跡の人）です！ スワミはほんの一瞬で何でも変えることがお出来に

なります。でも、スワミはおっしゃいました。

「駄目です、帰りなさい。エツリ ポ」 私はスワミがまるで私を追い返しておられるように感じました。

RS： あなたがそう感じた、どうしてわかるのですか？ あなたは胎内で父親の声を聞いたアビマンニュではないのですよ。

（訳注：アビマンニュは『マハーバーラタ』に出て来るアルジュナの息子。母の胎内にいる時に両親の話していることを聞いた。）

GG： なぜだかわかりますか？ この出来事は母が私に話してくれたのです。私は「何ということでしょう！ スワミは私が生まれる前から私を追い出されたのね」と言いました。でも、スワミは何と愛に満ちたお母さんなのでしょう。その後、スワミは母にひとつの果物を渡して言われました。

「セーラムに帰ってからこの果物を忘れずに食べなさい」

GG： それはオレンジでした。母は思いました。「これはオレンジだわ。早く皮を剥いて食

べましょう」そこで、母は皮を剥いてオレンジを食べました。皮を剥くと（中味は）別の白い果実でした。その白い果実の中に赤い果実が入っていました。スワミはほんの少しも無駄にはしてはいけないと言われたので、母はこの果物の皮まで全て飲み込みました。つまり、母はその果物をすっかり丸ごと食べたわけです。その果物を食べた後、私が生まれました。

RS: 私が思うに、その果物のクエン酸があなたに特別なユーモアのセンスを作ったのでしょうね。あなたは幼い時からバガヴァンがご自宅を訪問され、楽しいときを過ごして来られましたね。そのことを話して頂けますか？

1967年、バガヴァンのクッパム家訪問

GG: はい。私は昔からお転婆でした。ですから、父は私に「十戒」を定めていました、行動指示のリストです。そして、実は私の母、サラランマも大変いたずら好きで、母はスワミのお気に入りの帰依者だったのです。

母は懐中電灯を使って壁に絵を映し出すテクニックを持っていることで知られていました。スワミは母を側に呼んで「私にそのやり方を教えてくださいませんか？」と頼まれました。スワミはすぐ上達され、もっと良いものをお作りになりました。スワミは、シルディ ババ、ご自分、仏陀、クリシュナ、ラーマの絵を描き、同じテクニックを使って壁にそれらを映し出されました。そして、「みんな、来なさい！ 全員、早く、早く。大画面で映画を見せてあげよう」と大声で呼ばれ、人々は集まって来るのでした。



1967年、ダルシャンの時、スワミは私の母に、「私はあなたの家に行きます。チェンナイから行きます」とおっしゃいました。ですから、母はすべての用意を済ませ、家を飾りつけました。父は私を側に呼んで、「いいかね、スワミが来られてお帰りになるまで、お前はみんなの前に出て来てはいけません。お前は裏庭にいなさい」と指図しました。私はそ

の当時、四歳でした。私はとても従順にうなずきました。でも、私には私なりの計画がありました。ですから、皆が門の前で楽隊や儀式で使う器やガーランド（花輪）などを持ってスワミを出迎えていた時、アダムとイヴのエデンの園に悪魔が忍び込んだように、私はこっそりとスワミの部屋に入りました。私はドアの後ろに座り、聖者ヴィシュワミトラのように深い瞑想に入っている真似をしました。まもなく、スワミが部屋に入って来られました。スワミはお座りになり、私をご覧になりましたが、何もおっしゃいませんでした。しばらくして私は目を開き、スワミがまだ私を見ておられるかどうかを確かめました。

RS： 神が目の前に座っておられた。そしてあなたは瞑想をしていた。素晴らしい！

GG： ただ気を引くためだったのです。そのとき、スワミは急に立ち上がり、手を後ろに回して部屋の隅から隅へと歩き始められました。私は、この時とばかりに立ち上がりました。

スワミが一方からやって来られると、私はスワミがもといた方向に行き（同じように移動し）ました。ですから、もしスワミが右から左に行かれると、私も下を向き、手を後ろに回して、同じように真似をしたのです。その様子は、今でも私の脳裏に焼きついています。6回から7回、このようなことを繰り返し、遂にスワミは、「君は何をしているんだい？ さあ、こちらに来なさい」とおっしゃいました。

私はスワミのところに行きました。すると、スワミは聞かれました。「君は私の足跡について来たいのかね？」「はい、スワミ、私はついて行っています」 私は何も考えずにそう答えました。何もわからないまま、深遠な真理を述べていたのです。「スワミ、私はそうしているのです」

足跡について行くというスワミの御言葉は、大変象徴的な意味を含んでいます。それからずっと、私はそれをしています。



RS：そして、このいたずらっ子が姿を消し、スワミが来られる前に部屋の中に隠れていたことを、あなたのご家族は誰一人気付かなかったのですか？

GG：いいえ、父はすでに知っており、あきれ果てて言いました。「スワミがお帰りになった後、お前は私からお仕置きを受けるのだぞ」何はともあれ、注目を浴びたショーは終わりました！

RS：どのような結果に直面したかはともかく、あなたは生き延びられたようですね。

スワミのご降誕祭のダンス演技で起こった愉快的出来事

GG：ある時、私たちはご降誕祭の期間中にスワミの御前で演じることになりました。これはみんなを喜ばせた大変愉快的出来事で、とりわけスワミは一番ハッピーでした。このようなお祭りでは、スワミはいつも玉座にお座りになります。そして、私の母は素晴らしい芸術的なパーンビーダ（ベテルの葉と実で作った噛みタバコのような嗜好品）を作り、スワミは当時、それをよく噛んでおられました。それぞれのパーンは異なった形に折られ、ベテルの葉には砂糖とベテルの実と少量のスナム（水酸化カルシウム／消石灰）が入っており、これが舌を赤く染めました。スワミは以前、これを好んで噛んでおられたのです。

上演のことに戻りましょう。私たちは皆、演じるためにやって来ました。スワミ御自身が私たちを紹介してくださり、「セーラムから来た子どもたち、四人姉妹が私の誕生日を祝って演じます。これは素晴らしい上演になります」とおっしゃいました。スワミは私たちをご自分で紹介してくださったのです。

私はシヴァ神の役を演じることになっていました。上演の前に父は私に言いました。

「シヴァのダンスを踊る時、お前は第三の目を開かなくてはいけない。そうすれば本物のシヴァの姿になる。私は内側に爆弾（かんしゃく玉）を入れている。その爆弾が破裂すると同時にリングムが開くから、お前はリングムから飛び出して、自分の踊りを踊りなさい」私は破裂音の恐怖症でした。こういう音がすごく怖かったのです。

RS：では、あなたはリングム、つまりシヴァ リングムの中に隠れていたのですか？ その爆弾と一緒に？

GG：そうです。私と、私が持ったシヴァ神の三叉の鉾と、その爆弾とです。私はシヴァ リングムの真後ろにいました。私は文字通りとても震えていたので、三叉の鉾も震えだしました。

RS : それは大変不安そうなシヴァ神ですね、三叉の鉾も震えていたとは！



GG : 破壊の神自身が震えているのです。想像できますか！ そして観衆の中で、サイ シヴァ、すなわちスワミは笑いをこらえきれない様子でした。スワミは帰依者たち皆に、私のことを話し続けられました。「シヴァは緊張しているだけではありません。わかりますか？ 爆発が起こると同時に、一匹の蛇が外に出て来ると私は思います」そして爆弾は破裂し、私が姿を現しました。スワミはその様子を見て、お腹を抱えて笑っておられました。



RS: それからも、あなたはスワミを沢山笑わせましたね。大学時代でさえもそうでした。あなたはスワミが微笑まれるか、スワミの顔に笑顔をもたらすか、スワミを笑わせることに専念していたように見えます。

次号（第三部）に続く

http://media.rudiosai.org/journals/vol_10/01AUG12/04_gayatri_02.htm